

入選

近藤 竜徳 (こんどう りゅうと) 陵南中 2年生

作品名：どもる僕と『きよしこ』

図 書：きよしこ

「君は、だめになんかなっていないよ」

この本を手にとり、この言葉を初めて目にしたとき、背中から汗が滲んで、心の奥深くが確かにじんじん熱くなっていることに気付いた。

“どもり”で悩み続ける僕がこの本を知ったのは随分前のことだった。この本はどもりをテーマにしているが、この本を読むのは正直恐かった。読めば僕の心の弱みと向き合うことになる。それが恐かった。しかし、この夏休みに、真剣に向き合わなくちゃいけない。そう決心を固めてゆっくりページを開いた。

この本は“どもる”少年を主人公に、小学校から少年が大人になり、上京するまでの話を書いた短編集だ。

この本を読み進めていくうちに僕は考えさせられたことがいくつもある。それはどもることに限らず誰もが人というのは悩みが一つも無い人なんていない。ということだ。そして、それに続いて思ったことが、“悩み”に本当は大小の区別なんてないんじゃないかということだ。僕の友達に、陰がうすい、というコンプレックスを持っている友達がいる。他から客観的に見れば、そんなの努力次第、と言われたり、そんなこと大したことない。と言われてしまうかもしれないが、当の本人はとても悩み、いっぱい考えても解決されない問題なのだ。それが性格であったり身体的なこと、周りから見ればそこまで重大ではないことも、当の本人達にとっては、それが何より一番の重大で大きい課題なのではないかと思う。それが誰かに大したことではないと言われたり、

「それより苦しんでいる人はたくさんいる。」と言われることもあるかもしれないが、それは持っている本人の立場になってみないと分からない。その悩みにみんな真剣に向き合って考えて、他人の悩みを誰もが受け入れられたら、これほど幸せで、キラキラした世界はないだろう。この物語の少年はある一つの悩みをテーマに確かに成長していき、変わっていく。この物語を一言で表すならば、あたたかくて優しい。そんなお話だと僕は思う。僕のどもりはもう多分治ることはないだろう。だが、そのせいで僕自身誰かに何も伝えられないなんてことはない。

この本で僕が一番励みになったことは、周りよりあまりしゃべることが上手ではない自分でも、誰かに本当に大切なことを伝えることは必ずできる。ということだ。そして、僕はこの本を読んでから一つ誓ったことがある。それは、悩んでいたり苦しんでいる人達がいたら、それを認めて受け入れることだ。その人の話を聞いて、しっかり聞いて受け入れる。それだけで充分だと僕は思い、そして考えた。他人との理解を百パーセント深めることは無理だけれど、他者を思いやり、認めることはきっとできると思う。それは悩んだことが一度でもあるのなら僕だけでなく、みんなができることだと思う。

僕はこれまで言葉を自由にコントロールして、スラスラしゃべれたらどんなに幸せだろうとずっと、ずっと思っていた。だけど、それでも言葉が出ないときって、悲しい。悲しくて悲しくて後で泣いたことも数えきれないくらいある。でも今思うとそれは悲しいんじゃなくて悔しかったんだと思う。自分が伝えたいことを伝えきれなかったのが。こんな事を書いていると自分の感情がどんどんあふれてくる。それを伝えられるということはなんてステキなのだろう。しかし、それは口でしゃべることでしか伝えられないわけではない。どんな形であっても“伝える”ことはできるんだ。それが何よりステキなことなんだろうなと思える。それはこの本を読む前の自分では想像もできなかつたと思う。

この“どもり”は別名“吃音症”とも呼ばれている。僕自身この言葉はあまり好きではない。とても個人の勝手な意見になってしまふが、この感想文では書かないと決めていたが、急きょ書くことにした。それは吃音についての理解がまだ不充分だと気付いたからだ。

最後にこの本に出てきたとってもあたたかくて優しいぬくもりのある言葉を伝えて終わろうと思う。

「君の本当に伝えたいことだったら・・伝わるよきっと。」